

『雑譬喻經』 訳注

定 方 晟

「雑譬喻」という名をもつ經典は『大正大藏經』（第四卷）のなかに五点ある。すなわち、支婁迦讖訳『雑譬喻經』、失訳『雑譬喻經』、康僧會訳『舊雑譬喻經』、道略集『雑譬喻經』、鳩摩羅什訳『衆經撰雑譬喻』である。これらは「雑」の名にふさわしく、

仏教説話のなから雑然と選択された「譬喻」の集成で、五点のあいだでも内容が一致しない。このうち支婁迦讖訳は二世紀という早い時期に中国に知られたものとして重要である。早く伝えられた經典でありながら大乘的要素をいくつも含んでいる。本經を構成する一二話のうち、第一話、第三話に「（大乘の）菩薩」の語が、第六話に「摩訶衍」、第七話に「文殊師利」、第一話、第一話に「六度」の語が登場する。第四話「死んだ牛に草をやる」はパーリ語の『ジャータカ』（J.352）やバールフトの浮彫りに見られる古典的な説話である。

『仏書解説大辞典』第七卷、六七ページには美濃晃順氏による本經の要約がある。すずき出版『仏教説話大系』第九卷、一九八一年には本經中の第一、第六、第七、第十一の説話が和訳（意訳に近く）されている。シャヴァンヌの“Cinq Cents Contes et Apologues”には収録されていない。本經は大乘仏教史の研究に

役立つ資料と思われるので、ここに全訳を試みる。便宜上、説話ごとに見出し語をつける。

（一）阿羅漢にならない理由

むかし聡明な知恵ある比丘がいた。病をえて危篤になったとき、弟子が尋ねた。「（和上は）すでに阿羅漢になったのでしょうか、まだでしょうか」「まだじゃ。不還もまだじゃ。」

「和上は徳も高く、名も遠くはせているのに、なぜまだ（阿羅漢に）ならないのですか。」和上がいった。「すでに預流果と一來果は得たのだが、（上位の）二果にはまだ達していないのだ。」弟子が尋ねた。「預流果と一來果を得たのに、なにが障りで、阿羅漢になれないのですか。」「弥勒仏の（やってくる）ときが見たいのじゃよ。⁽¹⁾三度の集会があつて二八〇億人が阿羅漢になるときがな。菩薩になるものも数かぎりない。弥勒仏の尊く大きな身体は一六〇丈もある。その国の住民はみな桃色であり、寿命は八万四千歳である。土地は平らで、衣食は自然に備わり、閻浮の地は縦・横それぞれ三〇万里ある。これらのことが見たいので、阿羅漢にならないのだ。弥勒仏の世には二人の尊い弟子が現れる。ひとりとは雑施、もうひとりは数数という。私は

かれらをも見たいのだ。(かれらが)私のような人間であるかどうか知りたいのだ。」

弟子がまた尋ねた。「どこからそのようなことをお聞きになったのですか。」和上がいった。「経典によって知ったのだ。」弟子が言った。「生死の苦しみについて弥勒が(釈迦牟尼のとは)別の教えをもっているなら、かれを待つべきでしょう。」「別の教えはもっておらん。」「六度、四等、四恩、四諦に関しては違いがありますか。」「ない。」「もし、まったく同一で、両者に違いがなければ、なんのために待つのですか。いま(釈迦牟尼)仏の恩を受けておきながら、弥勒なぞに執着しておられる。弥勒なぞ待たずに、悟りに達すべきです。」

和上がいった。「もうよい。そなたはしばらく外にいてくれ。私は考えるから。」弟子が外に出ようとして、まだ戸外に達しないうちに、和上は阿羅漢になってしまった。弟子が戻ってきて、「どうしましたか」と尋ねた。師がいった。「阿羅漢になったよ。」弟子は礼をして、いった。「(私を)ひとことたしなめる間に阿羅漢になられたのですね。」

(1) 修行はつぎの四階程からなる。(一)預流(修行を始める)、(二)一来(もう一度だけ人間界〔欲界〕に生れる)、(三)不還(もはや人間界に生れない)、(四)阿羅漢(修行が完成する)。したがって、一来の階程に留まるかぎり、もう一度、人間界に生れて弥勒の出現に会おう可能性がある。

なお訳文中の「預流果と一来果」は原文の「頻来果」を訳したものである。「頻来」は「預来」「預流と一来」の誤りと解せられたからである。「頻」自体にも「近づく」「流れに近づく」の意がある。

(二) 禅定に入っているひとの身体の柔らかさ

むかし比丘がいて、禅定に入っているときには、野火も(かれを)焼くことができなかった。人々はかれをみて、「これは鬼だ」といって、かれを切り殺そうとしたが、刀が折れて、(かれのからだに)入

らなかった。精神を集中しているので、入らないのである。柔軟であるから、焼けないのである。

ある人が禅定に入った。弟子が食事と呼んだが、(その人は弟子の声に)気づかなかった。そこで(弟子はかれに)近づいて、その腕を引張った。腕は(するすると)延びて、一丈あまりになった。弟子は恐怖して、腕を結んでしまった。(弟子は)恐怖のあまり、結びめを解くことができなかった。師は禅定から覚めると、腕に痛みを感じた。弟子に聞くと、(弟子は)事の次第を話した。師がいった。「おまえが(結びめを)解いておかないから、私は(禅定から)覚めたとき、腕を折ってしまったではないか。」

ひとは、禅定に入っているときには、綿のように柔らかいものである。母の腹のなかにいるときもそうである。

(三) 姪女と戯れる僕僧

むかし罽賓国にひとりの菩薩がいた。地に生れ落ちたとき、地が大きく震動したので、父母(はじめ)みなが驚いた。またある修行者は頭を垂れて(かれに)拝礼し、花飾りを(かれの頭上に)撒いて供養した。かれは成長して出家し、聡明さと知恵を発揮した。しかし放蕩にふけり、無軌道ぶりを示した。かれの教えを聞いたものを(かれは)悟らせることができた。

そのころ二人の男が比丘になった。精舎にこもり戒律を守り、清浄な生活を長年つづけたが、悟りが開けなかった。神がかれらにいった。「かの国に比丘がいて多くのひとを悟らせている。」ふたりは遠路はるばる罽賓国にきて、弟子いりを願うでた。

そのとき例の比丘——「かの国にいる」比丘——は姪女と戯れていた。ふたり(の比丘)は面会を求めた。ひとりがまず入って挨拶をし、座にすわった。姪女は臥したままであったが、絶世の美女であった。(し

かし、比丘は）専心に経にききいり、雑念にとらわれず、道迹（預流果？）をえて、挨拶をして退座した。

（師の比丘は）もうひとりの新弟子を呼び入れた。（この弟子は）挨拶をして教えを聞こうとしたが、臥した姪女に気づいて思った。「この女は汚らわしく、よくない存在である。苦勞して遠くから来たのが無駄になった。」そしてかれは室外に出てしまった。（外にいた）比丘が尋ねた。「なぜそのように落胆しているのですか。（先生の説に）邪説でも発見したのですか。」「間違いました。私たちは遠路を苦勞してやってきたのに、先生はあのように汚辱にまみれ、不徳にふけています。」「あなたは立派な教えを学士の教えでないと思っっているのです。素直な心で教えを聞き、理解をえるべきです。どうして、良いの悪いのと騒ぎたて、勝手に毛嫌いし、悟りを得られなくしているのですか。」

そこで（二番目の比丘は）心を整え、（一番目の比丘と）一緒に入室して経を聞いた。そして、同じように道迹を得ることができた。一人（一番目の比丘）のほうは阿羅漢になることができた。師はかれらを客としてもてなし、かれらは故郷に帰った。

師はのちに典寺となり、寺の所有物を流用して、姪女と戯れ、止むことを知らなかった。僧侶たちはかれの追放を決議した。ひとりの阿羅漢が言った。「追放するのをしばらく見合すべきです。寺の所有物を流用してはいますが、多くのひとを悟らせています。」そこで追放は中止になった。

親しいひとたちがかれのところに来て言った。「あなたのむかしの弟子（二人の比丘？）のところに行って必要なものを乞いなさい。人も物も豊かです。」そこでかれはその国に行き、多くの物品を手に入れた。帰る、寺に倍のものを返却した。

（四）死んだ牛に草をやる

むかしある賢者が仏法を信奉し、精進していたが、病をえて死亡した。妻子は（死者を）慕って嘆き、悶々と日々を送った。火葬や納骨や埋葬も済んだが、日々の務めも忘れ、香もたかず、燈も灯さなかった。財産は豊かであったので、月はじめの朝晩に馳走を作って墓塚に供え、（その前に）集って泣きあい、悲嘆に暮れていた。

死んだ（賢者）はその徳によって天に昇っていたが、天眼で遙か見（おろし）て、かれらが自分を嘆き悼んでいる愚かなさまを哀れみ、少年に姿を変え、（かれらの）そばで牛に草を食ませた。ついで、牛が急死し、少年は泣き叫び、草を刈って、（牛の）口先に差し出し、食べなさい、食べなさい、と語りかけた。また、（牛の脊を）叩いて呼び起こそうとし、自分（の胸）を打ちながら（牛に）向って泣くこと終日に及んだ。（居合せた）ひとびとは嘲笑い、そばに近寄って訊いた。「おまえはどここの家の子か。牛は死んだのだよ。帰って、家のひとに知らせなさい。泣き喚いて、なんの役に立つの。牛は死んだということが分らないの？」

（少年は）言った。「ぼくは馬鹿じゃないよ。牛は死んだけれど、（死体は）まだあるから、望みがあるよ。あなたがたのお父さんとはつくの昔に死んだのに、（あなたがたは）たくさんのお馳走を供えて、（お墓に）向って泣き喚いています。（あなたがたがどんなに泣き喚いても）灰になった骨にはなにも分らないのですよ。」

ひとびとは（それを）聞き、ただちに悟りを開いた。（少年はいった。）「わたしはじつはおまえたちの父なのだ。仏のおかげで天に生れ、わざわざおまえたちを諭してきたのだ。だから、また天のからだに戻ろう。わたしのようになに精進し、（仏を）供養してくれることを望む。」（少年は）忽然と姿を消した。

妻子や親戚縁者は精進し、戒律を守り、布施をおこなってすべての

生き物を救い、もう嘆き悲しむことをしなかった。そして、みな預流果（道迹）をえ、みな同時に天に生れた。

(五) 修行者の模範となった石蜜商人

海中にひとつの国があった。私訶量（Sinhadvipa?）といった。そこは多くの珍しい宝を産出したが、石蜜だけは（産出し）なかった。そのときひとりの商人が、五百台あまりの車に石蜜を載せて、（この国に）やってきた。（かれは）思った。「（これを）王に献上しよう。受ける報償は町で売るのより大きいに違いない。」

かれは石蜜を王宮の門（前）に置いた。（かれは五百台あまりの車の石蜜を）自分（ひとり）で並べたのである。そうして月日がたったが、（門内から）声をかけるものはだれもなかった。かれは怒っていた。「王だって人間じゃないか。私だって人間だ。目、耳、鼻、口、四元素はどちらにも共通だ。それなのに会見することも言葉を交わすこともできない。理由は王の福德が人に優れているからなのだ。（よし）私も功德を積んでやろう。王が思わず知らず私のところに来るようにしむけてやろう。」

かれは沙門となり、石蜜で三尊を供養し、静かな場所を探して、苦、空、無我（非身）について瞑想した。（修行の）半ばに至らないうちに解脱（無縛）を体得し、六神通を獲得した。諸感官を抑制し、阿羅漢になった。大地は震動し、帝釈天はじめ神々が（かれのもとに）挨拶にくることになった。帝釈天らは降下し、礼をして、かれと喜びをともした。

比丘が帝釈天に質問した。「あなたがたはみな天上で何をしているのですか。」「天上には四つの公園があります。三つは五欲のための場所です。一つは道德のための場所です。ここ（道德のための場所）ではある時には仏典を論じ、ある時には天下の四種の修行者（精進持法

の者）のことを論じます。」「修行者のことを論じるのは（修行者すべてについて）同じようにですか。それとも深淺によって区別するのですか。」「善人について論じるだけです。仏の涅槃（泥日）以来、神々が称賛して止まないひとが三人います。」「それは誰ですか。帝釈天よ、私にそれをひとりひとり紹介してください。」

帝釈天がいった。「波羅奈国にひとりの沙門がいて（次のような）誓いをたてた。経行と遊行（仿佯）をおこなおう。阿羅漢になるまではけっして横になって休まないぞ、と。そしてかれは昼夜、経行を続けた。足は破れ、血が流れ、鳥のむれが追いかけてきて傷をついた。三年目に悟りを得、神々は（その悟りを）認め、こぞってかれを讃えた。」

羅閱祇国にひとりの男がいて、かれも沙門になった。草を敷いてしとねとし、その上に坐って誓いをたてた。悟りをえないうちは決して立たないぞ、と。そして暗くなってどうしようもなく眠くなると、ひとに長さ八寸の錐を作らせて、眠気が襲うたびに両腿を突刺させ、その傷みで眠気をさました。一年のうちに阿羅漢の道を得た。神々はまた未曾有のこととしてかれを讃えた。

拘睺尼国（Kāśyāpī）にひとりの男がいて、また沙門になり、山のなかの岩穴に籠った。峻険でたやすくはだれにも近づけないような場所であった。そのとき魔物がかれの精進ぶりを見て、水牛に化けて、かれのまえに現れ、鼻を鳴らし、目を吊り上げて、かれに掴みかかろうとした。比丘は恐怖しながら思った。ここは牛がこられるような場所ではない。どうしてこんなことがあるのだろう。起こり得ないことが起きる。これは魔物のしわざに違いはない、と。かれは声を鋭くしていった。おまえは魔物の化けたものであるう、と。魔物は、ばれたか、と思って、正体を現した。比丘は魔物にいった。あなたは私を怖がらせて何をしようというのか、と。魔物がいった。修行者が精進してい

るのを見ると、俺の領分から出ていかれるのではないかと心配になるのだ。それで、怖がらせにやってくるのだ、と。比丘はいった。私が沙門になった理由は、この世から脱出し、仏の優れた姿が見たい、というそれだけのことです。仏はこの世を去ったので、（この世では）だれもそれを見ることができないのです。聞けば魔物は仏に化けることができるそうですが、私のために化けてみてください。そうすれば私は精進するのを止めます、と。魔物はなるほどと思い、仏に化けて、かれのまえにたった。かれは（その仏を）念じて阿羅漢になってしまった。神々は空中からかれを褒め讃えて止まなかった。魔物は後悔し、失意のうちに姿を消した。

帝釈天が比丘にいった。「この三人は、神々が讃え続けていまだに止むことがない。」比丘が帝釈天にいった。「この三人は『苦、空、したがって朽身』の真理を明らかに悟りました。私ははじめはなんの考えもなく、ひとに軽蔑されていましたが、結局は道を求め、三界を脱出することを目指しました。そして、すばらしいことに、阿羅漢になることができました。」神々はこれに応えていった。「私たちはこれから天上に帰って、あなたを修行者の第一人者と讃えましょう。」こうして神々は礼をして去った。

さて国王は石蜜商人が精進して道をえたことを聞き、（かれのもとに）赴いて最敬礼をして過ちを詫び、（かれを）国師にし、三宝を興隆させた。国は平和を享受し、福をえる者、悟りをえる者は数しれなかった。

(六) 毒のない肉

むかしひとりの病人がいて、どの医者にも治すことができなかった。（かれは）薩和檀（Sarvadāna）という名の王のところにやってきて、王の慈悲にすがり、「どうか私の病気を治してください」といった。

王はかれに種々の医者をつけてやり、（医者たちに）かれの病気を治すように命じた。医者たちは奏上した。「この（病気の）薬が手にはいりません。」王はかれらに尋ねた。「その薬はどんな薬か。」世に五毒のない人がいたら、その人の肉でスープを作ります。それを吞むことによって治ります。五毒（がない）とはなにかというと、一に貪りの心がないこと、二に怒りの心がないこと、三に愚かな心が無いこと、四に嫉妬の心がないこと、五に残忍の心がないこと、です。もしそのような人がいれば、この病気はすぐに治ります。」

王は医者たちにいった。「その病人を私のところに寄越しなさい。私にだけはその毒がない。」王はただちに自分のからだの肉を切りとり、それを（医者に）与え、スープを作らせた。病人はそれを飲み、大乗（摩訶衍）（の心を）起こした。

(七) 汚い文殊師利

むかし長者（迦羅越）がいた。つねに文殊師利に会いたいと願っていた。そこでかれは大規模な布施を計画し、高壇を設けた。そこにひとりの甚だ醜い老人がやってきた。目から目やにが出、鼻から鼻水が出、口のなかには唾がたまっていた。長者は（かれが）高壇に坐ったのを見て腹をたてた。「私が今日高壇を設けたのは、高德の沙門がそのうえに坐るようにだ。おまえはどこのだいっだ」といって、（老人を）ひきずりおろした。

布施が終って、長者は燈を灯し、香を焚き、寺院内に入った。「この功德によってこの世で文殊師利にまみえますように。」そして、帰宅し、疲れて寝入ってしまった。夢にひとが現れて、いった。「おまえは文殊師利に会いたいと願っているが、かれを見ても気がつかない。さきほど高壇のうえにいた老人こそ文殊師利だったが、おまえは（かれを）ひきずりおろした。おまえはするように前後七回、かれを見て、

かれに気がつかなかった。どうして文殊師利に会うことができようか。もしひとが菩薩道を求めるなら、すべてのひとに対して心を等しくしなければならぬ。菩薩道を求める者を文殊師利は試しに行くのだ。よくこのことを心得なさい。」

(ハ) なにごとも因縁

無常の家（死者の出た家）のために譬喩を説く。一本の大樹があり、その果実は二升瓶のようであった。その果実が熟して垂れ下がっていた。鳥が飛んできて上方の枝にとまった。果実が鳥の頭上に落ちて鳥を殺した。樹神がこれを見て詩を唱えた。

鳥がきたのは死ぬためではない。果実が落ちたのは鳥のためではない。

果実が熟して鳥が死ぬ。因縁が積り、そうさせたのである。

人が世にあるかぎり、罪と徳と（の結果）は遅かれ早かれ（かれのところ）やってくる。決して退き消えることはない。優れたひとは罪（の結果）をえても恨まず、徳（の結果）をえても喜ばない。だからこそ、真理として仏語を信じて、捨てることがない。三界のうちには九十六種の宗教があり、ひとびとはおのおのその奉じるところに従って、神に利益を祈っている。これらの卑小な宗教は、福への道をいまだ明かしていない。どうして徳を守ることなど知っていよう。三尊の至上の知恵を知らず、五戒の清浄に従わず、八正の奥義をもたずして、どうして人を救うことができよう。だからこれらは薄田と名づけるはかないのである。

(九) 仏は福田——小さな種から大きな実り

仏三尊を敬い、三世を見通し、天界の福を認識し、地獄（太山）の罪を理解し、三宝を信じれば、三塗に陥ることを免れる。知恵の力を

強化し、それによって三界の無知を消滅させる。六根清浄（六浄）の神水を修得し、それによって六患の穢を洗い流す。こうすることにより、財産を軽んじ、自分の身を犠牲にし、無私の布施を行なって、来世のための根を植える。一を施せば万の報いがある、（その）早いことこだまのようである。だから仏法（大道）を「三界の良田」という。なにをもってこれを説明しようかというならば、むかしアショーク王が前世で子供であったとき、道で仏に会い、喜びに耐えず、わずかの砂を真心こめて仏に献じた。アショークはその福德によって聖王になることができ、四〇万里にわたる十六大国を支配することができた。これでもって明らかとなる、仏こそ最高の良田であることが。

むかし仏の弟にナンダがいた。前世では毘婆尸仏（維衛仏）のとき、人となり、一度僧侶たちの（足）を洗う（という）福德を積んだことがあった。福德は自然にかれに付いてまわり、かれはシャーキャ族のなかに生れることになった。からだは五・六（すなわち三〇）の特相をおび、神のように金色に輝いていた。前世の福に乗じて仏と同じ世で研鑽を積み、六通を得た。

昔のひとですら一度布施するだけで、このように大きな報いを得たのである。ましていま、⁽¹⁾あなたがた檀越が多く、行を成すならば、無私の行をひろく行なって、必ず尊號を得るであろう。歡喜を増加させ、すべての衆生を救うであろう。

(1) 汚濁の世における善行はいちだと価値がある、の意？

(十) 最強の相撲とり

(仏) 法では言っている。穢れた精神は何億年にもわたって残存し、生死を引起こし続ける。道をえれば、（その活動は）ただちに止む、と。

むかし仏の涅槃のち五一〇年のとき、ひとりの国王がいた。その

精進よりはたくましく世にもまれなほどであった。三月に一度(?)六万人の沙門を極上の美味の食事で供養した。(沙門のうちの)最長老の沙門は典籍を読みつくし、往古の達人たちの心に学び、阿羅漢になっていた。

この国の東四八〇里にひとりの国王がいた。五百人のバラモンをかれもまた贅美を尽くして供養した。(かれは)百種の旗を絹や綿で作し、それに金その他の宝物を吊り下げ、一つの旗が五百両にも値いするようにして、(言った。)[「技芸でもってバラモンたちを楽しませよ。上手にそれをおこなった者にはこれを与える。」]

諸国の貧しい人々は王がそのような宝を準備していることを耳にした。そして各地から集った五百人ほどが(前記の長老沙門がいる)精舎を経由して(そこへ)向った。特技を身につけ、その宝を勝ち得ようとしたのである。しかし食料が尽きて(目的地に)到達することができなくなり、長老沙門のまえに現れて、沙門になることを願ひ出た。長老沙門はかれらを觀察して(つぎのように思った。)かれらは毘婆尸仏のときに賢者の家の使用人となっていて沙門に飲食物を作ったことがあり、また仏法を聞いたことがある。そのことにより、それ以来、神や人間の世界で自然に福をえることになった。福はいま尽きかけているが、仏語(の力)がまだ残っているの、かれらを救うことはできる、と。

(かれはかれらの)髪を切り、戒律を授け、王宮に連れていき、食事を与えた。(かれらは)大いに喜んだが、師はかれらの心を知り、かれらに説教した。この飯はむやみに食べてはいけない。ひとが真心なくこの食事をとると、なん劫か先には王の牛馬か奴隷になる、と。五百の新参比丘たちはそれを聞いて恐怖し、こころを励まし精進し、九〇日目にみな阿羅漢になった。比丘たちは悟りをえると、この次第を(ひとに)知らせたくてたまらなくなった。かれらは(バラモン

を供養している王のところ)に馳せつけ、王門に入りながら叫んだ。私たちは相撲の競技をしにやってきたぞ。三毒、十二因縁、五陰、六衰、私たちはそれらをみなやつつけたのだぞ。だれか私たちに手向う者がいるか、と。

大衆は「こいつらは何を言うのか」と怪しんだ。比丘たちは言った。私たちははじめ技芸を習得して王の宝を手に入れようとしたが、沙門になって阿羅漢となり、三界の諸悪をうち負かしたのだ。大師の恩を受けて、これ以上の幸せはない、と。

(出) 牛になった弟

むかし二人の兄弟がいた。(家は)大変な金持で、莫大な財産があったが、父母が死ぬと、頼りを失った。かれらは兄弟でありながら、志すところは違っていた。兄は宗教を好み、弟は家業を愛した。(弟は)官職と報酬をえて、世間的な出世を追及した。家は波利弗(Pāṭipura)の近くにあり、雞鳴精舎はそこから遠くなかった。兄は修行に専念し、道を追及し、家業を省みなかった。

弟は兄が家事に無関心なのを見て、かれを嫌悪していた。「たがいに兄弟であり、早く父母に死なれたからには、努力して、生活のことを考えねばならないのに、家業を捨て、沙門の仲間と交わって、仏經などに耳をかたむけている。沙門があんたに衣や財産をくれるか。家はだんだん貧しくなり、財産は日ごとに減り、ひとの嗤いものになる。これを言うのだよ、怠惰にして家系を絶やす、とは。およそ人の子であるならば、手柄をたて、父母のあとを継ぎ、家名を廃れさせないのが親孝行というものだ。」

兄はこれに答えて言った。「五戒、十善、三宝の供養、六度の実践、坐禅、念定などをもって親を導く、これが親孝行である。宗教者と俗人が相反するのは自然の勢いである。宗教者が好むものは俗人が嫌う

もの、俗人が尊ぶものは宗教者が軽蔑するものである。知恵と愚昧は譬えれば明と暗のようなものだ。一つところに共存することができない。だから、知恵のひとは暗を去り、明に赴き、真理を究めるのだ。おまえがいま享受しているものは苦悩の自己である。すべては空無、虚偽、不真である。迷いに落ちているから有と思ひ込んでいる。どうして苦悩を知ることができようか。」

弟は怒り、頭を左右に振り、(兄の言葉を)受入れなかった。兄はそれを見て、言った。「お前は家業に執着し、財産を尊いものとみなしている。私は真理の道を好み、知恵を尊いものとみなしている。わたしはいま家を出て、福田に帰命しようと思う。人生を貪り、世俗に頼ることの儚さは飛ぶ塵のそれに等しい。無常は突然に訪れ、罪はわれわれを覆う。だから(私は)世を捨て危険を避け、安全な場所に赴くのだ。」

弟は兄の意志が修道にあるのを見て、もはや何も言わなかった。兄は家を去り、沙門になった。朝はやくから夜おそくまで精進し、経を唱え、道を思い、一心に坐禅した。思索をめぐらし、休むことなく、怠けることがなかった。根力三十七品を体得し、経と法をとともに実践し、成道の成果を得た。それから弟のところいき、仏法を奉じるように勧め、五戒、十善など天に生れるもとや、布施、学問など宗教的知恵のもと(を説き勧めた)。弟はそれらの言葉を聞いてますます怒りを増大させた。かれは兄にいった。「あんたが家業をすて家門を絶やそうとするのは勝手だ。しかし、それはひとりやってくれ。私にも教えを垂れようなどとしなされるな。すぐに門から出ていってくれ。私のことなど構わんでくれ。」兄はたち去った。

弟は家業に専念し、汲汲として倦まなかった。そして一度も法に心を用いることがなかった。かれはやがて命を終え、牛に生れ変わって、丸々と太った。商人がかれを買取り、かれに塩を載せて塩の販売をお

こなった。往復を繰返しているうちに、牛は痩せおとろえ、前に進むこともできなくなった。そして登り坂で疲れ果て、うずくまり、立ちあがるができなくなった。商人が鞭をあてると僅かに頭を揺らした。そのとき兄は遊行して虚空を渡っていたが、遠くからその様子をみて、直ちに思惟し、その(光景)が何に起因するのかわらうとした。(そして)その(牛の)前世は何であつたかと観察すると、それは弟であつた。

兄は弟にいった。「弟よ、おまえが住んでいた家や畑、おまえが享受していたものはいまどこにあるのだ。(なぜ)牛の群などのなかに生れたのだ。」(兄は)神通力で(弟に弟の)もとの姿を示してやった。(弟は)自分のもとの姿を知って、涙を流し、自分の前世における不善の行ないを悔いた。貪欲であつたこと、嫉妬したこと、仏法を斥けたこと、仏僧たちを軽んじたこと、自分勝手にふるまって兄の言葉を信じなかったこと、仏法にそむき、自我を押し通したこと、(等々)。そのために牛などに生れ、痩せさらばえたのだ、(いまさら)悔いたとて何になるう、と。

兄は(弟の)心を知り、哀れみの気持にうちひしがれた。そこで牛の飼い主に事の顛末を話した。「事情はこうなのです。これはもとは私の弟なのです。三尊を信じず、真理に脊を向け、誤謬に顔を向け、欲を張り、勝手に、布施を惜しんだので、牛となって生れ、痩せ衰え、哀れな境遇に陥っているのです。いまは老いばれ果てて、役に立たないほどです。どうか私にお譲りくださり、残りの命を全うさせてやってください。」商人はそれを聞いて牛を譲った。(兄は)牛を連れて寺に帰り、三宝を念じさせ、好むときに食事をさせた。弟は命を終えると、忉利天に生れた。

商人たちはめいめい考えた。「私たちはあくせく働き、人生に厭いの気持を起こさなかった。布施もおこなわず、仏法も奉じず、正しい

道も知らなかった。死は恐ろしいものであり、われわれもこれを免れることはできない。」商人たちはともに家を捨て、妻子を捨て、大切にしていた品物を捨てて、沙門になり、精進して怠らず、悟りに達した。以上のことを考えてみると、世間の財宝はひとに利益をもたらさないこと、三尊を敬い、身を修め知恵を学び、広く聞いて道を行なえば、いくたび生れ変わっても安らかな人生が送れること（がわかる）。

(㉔) ひと房の葡萄の布施

むかし舍衛国に貧しい家があった。庭にぶどうの樹があり、いくつかの房がついていた。（この家の優婆夷は）修行者に布施することを思いついたが、王がすでに一か月の施食を申しでていた。この貧しい家は無力だったから、王と競うことはできなかった。彼女はじつと一か月まった。（一か月のち）、ひとりの修行者をみつめてかれに（ぶどうを）布施することができた。彼女は修行者にいった。「布施を心がけて以来一か月たって、いまやっと願いがかないました。」修行者が優婆夷にいった。「一か月も布施をしたんですね。」優婆夷がいった。「私はぶどうをひと房さしあげただけです。どうして一か月も布施したといえましょう。」修行者がいった。「でも一か月、布施を心がけたのです。だから一か月といえるのです。」

ひとの世に一八の難事がある。（一）仏の世に出会うこと。（二）仏の世に出会い、人として生れること。（三）人として生れ、中央インド（中国）に生れること。（四）中央インドに生れ、（正しい）家系に生れること。（五）（正しい）家系に生れ、身心（四肢・六情）ともに満足であること。（六）身心ともに満足であり、財産を有すること。（七）財産を有し、良き指導者に（出会うこと）。良き指導者に出会い、知恵を有すること。（八）知恵を有し、善心を有すること。（九）善心を有し、よく布施すること。（十）よく布施し、知恵と徳を備えた人に会おうとすること。（十一）知恵と徳

を備えた人に会おうとして、その人の所に到達すること。（十二）その人の所に到達し、その人の都合に恵まれること。（十三）（その人の）都合に恵まれ、正しい教えを受けること。（十四）正しい教えを受け、その意味を理解すること。（十五）その意味を理解し、種々の深奥な經典を受けること。以上が一八の（難）事である。⁽¹⁾

(1) 文中、数字が合わない。（㉔）と（㉕）が欠如し、全体で一六の難事しかない。